

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ③

* 神よ、ワインを飲まぬ者から我を守りたまえ *

緋月 まや

イタリア語の魅力は、その音楽的な響きにあると多くの人が言う。けれど私は、イタリア語の美しさは文法、なかでも congiuntivo (接続法)にあると思う。indicativo (直説法)が客観的事実を表現するための言葉であるのに対し、接続法は話し手の主観を表現する。自分が思っていること、頭の中に思い浮かんだ不確かなこと、心の中で思い描いた願いを伝えるための言葉だ。それは多くの人の意見と食い違っていて、客観的事実ではない。主節「私は思う」と従属節「イタリア語の美しさは接続法にある」、この二つが接続詞 *che* によって結ばれたとき、従属節の動詞は接続法で活用することになる。つまり、*consistere*「～にある」という動詞は *consista* になる。「イタリア語の魅力は音楽的な響きにある」のが客観的事実だとすれば、直説法で活用して *consiste* となる。語末が *a* か *e* か、たとえば、それだけの違いだ。そんなわずかな違いにこだわり、主観を客観から切り離して表現しようとするこの繊細な世界観は、とても知性的であると同時に、美を表現するために計算された至高の技を彷彿とさせ、芸術の国イタリアにとってもよく似合っている。言葉は、国の文化を映す。接続法がわかれば、イタリアという国の深層にふれることができる気がして、こんなにも心惹かれるのかもしれない。

こうして接続法のことを考えていると、二年前のある冬の日を思い出す。フィレンツェに暮らし始めてまもないころだった。サンタ・クローチェ広場の

近くに、トスカーナ料理を出す小さなレストランを見つけた。黒キャベツとサルシッチャ(腸詰め肉)の pasta を注文すると、グラス一杯のキャンティを傾けながら、店内を見回してみた。落ち着いた照明の中、赤い壁に取りつけられた飾り棚にワインボトルが整列し、それを取り囲むように、チョークで手書きされた文字が躍っている。どうやら、ワインにまつわることわざが並んでいるようだった。



【レストランの飾り棚に、ことわざが！】

そのとき、左端に記されていたその白い文字の列に、私の目は釘づけになった。

DIO MI GUARDI DA CHI NON BEVE.

この GUARDI は接続法のはずだ。そうだとすれば、「神よ、ワインを飲まぬ者から我を守りたま

え」と読める。いや、しかし、本当にそうだろうか？直説法 GUARDA の書き間違いという可能性はないだろうか。確信が持てなかったのは、この文に che がなかったからだ。このときの私はまだ、冒頭で示したように、接続法は che に導かれる従属節の中にあるものだと思っていた。偶然にも翌日、それこそ神の恩寵か、che のない独立節にも接続法は使われることを語学学校で教わった。文字通り congiuntivo indipendente と呼ばれる。いくつかの用法があるが、願望を示す表現の一環として、神の加護を求めるときに使われるのもひとつの定番である。接続法の奥深さにふれて、胸がキュンとなった。

しかし、釈然としない何かが残った。「神よ、ワインを飲まぬ者から我を守りたまえ」。ワインを飲まない人たちの、何が危険で神様に守ってもらいたいのだろうか？ワインの神、かのバッカスを父と仰ぎ、ワインを命の水とするとはいっても、私は日本人だ。その感覚からすれば「神よ、酔っ払いどもから、我を守りたまえ」の間違いではないのかとも思われた。冗談好きのイタリア人のことわざである。ならば、これは冗談か？さもなければ皮肉か？本気で言っているのだとしたら、その真意は何なのだろうか？

コロナ禍の家ごもりを活かして、放置していた疑問を解くべくネット検索の旅に出た。そこには、世界中の偉人たちからの、くめども尽きぬワイン賛歌があった。

古代ギリシアの哲学者、あのプラトンは、Il vino per l'uomo è come l'acqua per le piante, che in giusta dose le fa stare bene erette.「人間にとってのワインは、植物にとっての水のようなもので、適量であればピンと直立した状態を保たせてくれる」と、「酒は百薬の長」を連想させる。ワインはバッカス(ギリシャ神話ではディオニューソス)の贈り物である。

天文学の父、あのガリレオ・ガリレイは、Il sole, con tutti quei pianeti che gli girano attorno e da lui dipendono, può ancora far maturare una manciata di grappoli d'uva come se non avesse nient'altro da fare nell'universo.「すべての惑星は太陽の周りを回り、太陽に依存しているのであるが、その太陽は(それほどの重責を担

いながら)、宇宙にはそれ以上大事なことなど他に何もないとばかりに、ひとつかみの葡萄の房を熟させる(という偉業を達成することまでもできる」と、天空からの壮大な視点でワインを称える。



【カラヴァッジョの「Bacco(バッカス)」、フィレンツェ、ウフィッツィ美術館所蔵】

出典元: <https://it.wikipedia.org/wiki/Caravaggio>

Se Dio non voleva che bevessimo, perché ha fatto il vino così buono? 「我々が飲むことをお望みでなかったとしたら、神はなにゆえにワインをこれほどまで美味につくりたもうたのか」。カトリック教会の聖職者であり、ルイ 13 世の宰相として知られるあのリシュリューは、フランスらしくグルメな見解だ。

Il vino è il più certo, e (senza paragone) il più efficace consolatore.「ワインは一番確かで、(比べようもなく)一番よく効く癒しである」と、イタリアが誇る 19 世紀の詩人、あのジャコモ・レオパルディが詠えば、La vita è così amara, il vino è così dolce; perché dunque non bere?(人生はこんなにも苦く、ワインはこんなにも甘い。ならばなぜ、飲まぬものか)と、20 世紀の抒情詩人、あのウンベルト・サバも、ワインに心の慰めを求める。

ヒポクラテスもモーツァルトもナポレオンも、だれもかれもがワインを賛美している。古来、「飲まぬ者」は異質で、警戒すべき不審者なのか。なら

ば、何を怪しんでいるのか。作家で、「Aforisticamente」という格言サイト創設者のFabrizio Caramagnaさんに尋ねてみることにした。答えに到る鍵は、19世紀フランスの詩人、あのシャルル・ボードレールの一言にあった。

Chi beve solo acqua ha un segreto da nascondere。「水しか飲まぬ者には隠し事がある」

「水しか飲まない、つまり、ワインを飲まない人間には隠し事があるので信用できないということです。DIO MI GUARDI DA CHI NON BEVEは、よく知られたイタリアのことわざですが、その背景にあるのはこの不信感です」と、Caramagnaさんは説く。

In vino veritas「ワインに真実あり」だ！ボードレールの言葉は、現代イタリアでもよく使われる、このラテン語のことわざを思い起こさせた。ワインに酔えば、人は本音を語りだすという意味だ。そこに本性が現れ、隠し事は明るみに出る。原点はここにあったのだ。イタリアであれフランスであれ、ワインをイエスの血と見なすカトリック諸国において、最たる隠し事といえば、そのイエスを磔刑に到らしめたユダの裏切りともいえる。実際、今年、没後700年を迎えた詩人にして「イタリア語の父」、ダンテ・アリギエーリは『『神曲』地獄篇で、数ある罪の中で一番重い罪を裏切りと位置づけている」と、ダンテ研究者で語学学校の恩師 Lorenzo Bastidaさんは指摘する。隠し事に対する憎悪感は日本人の比ではないのかもしれない。「神よ、ワインを飲まぬ者から我を守りたまえ」とは、悪巧みをしている危険人物、それがもたらす災いからの守護を求める願いだったに違いない。

guarda il calor del sol che si fa vino, (太陽の熱がワインになるのを見なさい)

ダンテの「神曲」煉獄篇第25歌からの一行である。「葡萄がワインになるのではなく、太陽がワインになると記されているのです。太陽とは、神の愛のことです」とBastidaさん。ワインは、神の愛でつくられたお守りの十字架なのだ。

*

イタリアは2月中旬、新型コロナウイルスへの対応をめぐり、コンテ政権からドラギ政権に移行し

た。コロナ禍での行動規制は昨秋来、感染状況によって州ごとに「赤」「オレンジ」「黄」の三分類で敷かれてきたのだが、この間、規制のない「白」が登場した。サルデーニャ州が初認定され、レストランの夜間営業や映画館、劇場の再開が許可される吉報もあった。しかしながら、感染力の強いコロナ変異株と普及速度に欠けるワクチンとの攻防は前者が優勢で、感染による死者はついに10万人を超えた。新政権は規制強化に舵を切り、3月15日からは過半数の州がロックダウン状態の「赤」に逆戻りした。キリスト教において最も重要な祝祭であり、商戦期にあたる4月上旬の復活祭にも、クリスマスに続いての厳しい規制が設けられることになった。春はまだ、遠い。



【ロックダウン中、観光客が消え、市民が憩うサンタ・クロチェ広場】

そんな中、今回の執筆にあたり、この「神よ、ワインを飲まぬ者から我を守りたまえ」ということわざに出会わせてくれた、その素敵なレストランを経営していた男性が、コロナ後の不確かな未来を憂い、自ら死を選んでいくことを知った。店を再訪してみたが、扉は固く閉ざされていて、手を合わせることしかできなかった。きっと、ワインがお好きな方だったに違いないと、私は思う。もしかしたら、あの白い文字はその方が書かれたものだったかもしれないと思う。願わくは、どうか、せめて——その方が天国でおいしいワインを飲んでおられますように。

(ライター、イタリアソムリエ協会/AIS認定ソムリエ)

この一年のこと

深草 真由子

去年の春、ブラジルのポルト・セグーロにいる友人からハートマーク♥がいくつも並んだメッセージが届いた。コロナウイルスのことであちらも大混乱だという。

「ウイルス(性)」と訳される *virale* という形容詞がある。マスメディアなどでこの語をよく目にするようになったのは割と最近のことだと思う。ネコの動画やら有名人の写真やら、SNS で注目を集めて多くのユーザーにシェアされた情報のことを *video virale*、*foto virale* などと呼ぶのだ。Virus はもともとラテン語で「毒」を意味したのだが、ここで使われている *virale* にウイルスの「毒」の意味はない。アカデミア・デツァ・クルスカ(イタリア語の協会)のホームページによると、伊伊辞典の *virale* の項に「驚異的なスピードで世界じゅうに拡散された」という意味が追加されたのは 2014 年のことだそうです。

説明がすこし長くなってしまったが、ブラジルから届いたメッセージは「ウイルスではなく、愛を *virale* にしよう」というものだった。だからあんなにたくさんのハートがついていたのだ。

私の暮らすイタリア南部カラブリア州のコゼンツァでは、今これを書いている 2021 年 3 月 9 日までにコロナウイルスに感染した人は 11,560 人、命を落とした人は 294 人にのぼる。コゼンツァ県の人口と面積が島根県のそれとだいたい同じであると言えば、状況の深刻さは理解してもらえるかと思う。それでもミラノやベルガモのあるロンバルディア州など、甚大な被害を出している北イタリアとくらべれば、ここはまだ落ち着いているほうだろう。

今から思うと私は当初かなりのんびり構えていた。3 月のはじめに「明日から学校閉鎖」と聞いた

ときも(日本ではすでに休校要請が出ていたにもかかわらず)なんの話をされているのかまったくピンとこなかったのだから。

実は 2 月にはすでに中国人が経営しているレストランは客がまったく入らなくなっていたし、私も電車の中でほかの乗客にあからさまに避けられたことがあった。ロンバルディア州のコーニョという町で市中感染がはじめて確認され、北イタリアには封鎖されているゾーンがいくつかあった。感染者数も死者数もニュースをチェックするたびに桁が一つ上がり、絶句した。それでも、私にとってはまだ遠くで起きている出来事)だった。自分がいるのはイタリア半島の南のはしっこ。よそから人がたくさん集まってくるような場所でもない。だいじょうぶ。



【一時休業やソーシャルディスタンスを求める店頭掲示】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Pandemia_di_COVID-19_in_Italia

ところが、それから一週間もたたないうちにイタリア全土が封鎖されることになった。「これは戦争」「第二次世界大戦以来の非常事態」。急にそんなことが言われるようになった。

そのとき私の頭をよぎったのは戦争ではなくて、東日本大震災の原発事故だった。今回は「ただちに云々」はあてはまらないだろうが、健康と日常生活が脅かされる大事件だという意味で重なるところがある。ウイルスも目に見えないし、そう簡単にはコントロールできない。人々はいったんは悲しみから連帯するが、やがて意見の相違で対立

するだろう。ああ、ますますいやな世の中になりそう。どうしたら呑みこまれないでいられるだろう…

それからは忘れられない一ヶ月になった。都市封鎖と聞いてミラノから急いで脱出する人たちや、刑務所の屋上を占拠した囚人たちの映像を見たときは動揺した。サン・ピエトロ広場で教皇がたった一人で神に祈りをささげる姿には心を打たれた。

こんなことになるなんて私は予想もしていなかったし、準備もまったくしていなかったが、使い捨てマスクを2、3枚もっていたのは幸いだった（一ヶ月以上使いまわさなければならなかったが）。

外に出ると、車が多くていつもうんざりさせられた道はさびしいほど静まり返っていた。いつも行くスーパーの入り口にはイタリアの三色旗が掲げられていて、その前で入店の順番を待っている人たちが「列を抜かした」「いや抜かしてない」と言い争っていた。

店の中はいつも通りで、買い占めなどは起きなかったものの、ぴーンと張りつめた空気が漂っていた。それだけでなく緊張しているのに、スキューバダイビングの用具で頭部をおおった男性が中に入ってきたのを見たとき、私は心臓が止まるかと思うほどびっくりした。彼もマスクを買いそびれたのだろう。

仕事や治療のための移動はできたが、路上でカラビニエーリのコントロールがあり、移動の必要性を証明するものが求められた。私の住む町では散歩の範囲まで細かく定められたので（家から半径200メートル以内）、おなじ場所をグルグル歩きまわって体を動かし、太陽の光をあびた。イタリアじゅうどこでも似たような状況だったと思う。

にもかかわらず、ヴェネトから自動車でシチリアまで行き、ボートを購入して島にわたったカップルがいたりするのが、この国の不思議なところ。どうやら彼らは terrapiattisti とよばれる「地球平面説」の信者たちで、この世界の果て（と彼らが信じるところの）ランペドゥーサ島に避難することがこのパンデミックを生きのびる唯一の方法だと考え、イタリア半島縦断の旅を強行したらしい。

人の往来が消えて街はめっきりさびしくなった

が、その代わりにバルコニーが華やいだ。子どもたちが“*Andrà tutto bene*”（すべてはきっとうまくいく）という合い言葉といっしょに七色の虹の絵を画用紙に描いて、それをテラスに貼りだし、大人たちを励ましてくれた。うちの近所の人（大人）は画用紙ではなく家の外壁に直接ペンキで描いた。一年たった今でもその絵は鮮やかに残っている。



【筆者の近所の家のバルコニー】

また、知り合いが感染拡大のシミュレーションをたて、それがメディアに取りあげられたこともあった。その人の専門は宇宙物理なのだが、太陽のプラズマを解明するのと同じメソッドを使えば疫病のことも分かるそうで、データを集めて計算したのだという。彼の予測によれば、もし政府の出した指示に市民がきちんと従えば、カラブリア州のピークは3月22日、感染者数は200人前後で、4月末にはゼロになるという。私には高度な計算を検証する能力はないけれども、州外からウイルスがもたらされる可能性などが考慮されていないことが気がかかった。結局、カラブリアに第一波のピークがきたのは4月中旬のことで、感染者の数は800を超えた。

秋になり、第二波がやってきた。今度は全国で一斉にロックダウンするのではなく、状況に応じてすべての州を「レッド」、「オレンジ」、「イエロー」、「ホワイト」に色分けし、それぞれにふさわしい措置を適用していくという。カラブリアはさっそくもっとも厳しい措置がとられるレッドゾーンに指定され

た。人口あたりの感染者数は、同じくレッドゾーンになった北イタリアの州にくらべて桁違いに少ないものの、医療体制がなっていないというのがその理由だった。

カラブリアでは10年前に財政難から18の公立病院が閉鎖されていた。治療をうけるためにミラノやボローニャまで行くという話を私もときどき耳にした。

かようにもともと心配な状況であった上に、コロナ禍がはじまって半年経つというのに準備がまったくできていない。なんと、州のコロナ対策の責任者は、ジャーナリストにその無責任ぶりを追及されるまで、自分が責任者であることを知らなかったのである！こんなことが理由でレストランもバーも営業が制限されるのだから、みんなの怒りが爆発した。

12月になるとコゼンツァの駅前広場に仮設の病院ができた。さらに、戦闘地帯で医療を提供してきたNGOがカラブリアに応援に駆けつけてくれ、状況はなんとか改善した。それでも学校は開いたり閉まったりで、大学は基本的にずっとリモート授業をやっている。映画館やスポーツジムはもう何ヶ月も閉まったままだ。はじめて自宅で過ごすことになったクリスマスは小さなモミの木を買って飾りつけ、ささやかにお祝いした。このようすと4月の復活祭もステイホームだろう……



【コゼンツァ駅前の仮設病院】

ところでブラジルの友人のことだが、彼女はつい先日(ブラジル大統領が「泣き言はやめろ。い

つまで悲しんでいるつもりだ」と言い放った日)、親戚の一人をコロナウイルスで亡くした。その訃報を知らせてくれたときも、大統領に怒り心頭するときも、メッセージの締めくくりには色とりどりのハートマークをずらりと並べてくれた。

(元当館スタッフ)

～会館だより～

<春のイタリア語無料体験レッスン>

4月からの春学期開講に先だち、無料体験レッスンを開催します。この機会にぜひ新たな世界への扉を開けてみましょう！

●イタリア語

京都本校: 4月3日(土)11:00
4月6日(火)11:00

四条烏丸: 4月5日(月)19:00

大阪梅田校: 3月31日(水)11:00
3月31日(水)19:00

●スペイン語

京都本校: 4月6日(火)16:00



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>